

「新しい東北」復興ビジネスコンテスト 2015・JTB 賞 記念対談



【写真左：宝来館 岩崎昭子女将】

【写真右：株式会社ジェイティービー 久保田穰常務取締役】

先般実施された「新しい東北」復興ビジネスコンテスト 2015 において、宝来館が JTB 賞を受賞したことを記念して、平成 28 年 3 月 24 日、株式会社ジェイティービー・久保田穰常務取締役と、宝来館・岩崎昭子女将との間で対談が行われました。

どんぐりウミネコ村の取組みについて

岩崎 「どんぐりウミネコ村」は仮想の村で実際に釜石市にある村ではありません。村の範囲は世界遺産に登録された橋野高炉跡のある橋野鉄鋼山から大槌湾流域までで、「どんぐり」はどんぐり産直の名前から、「ウミネコ」は宝来館が根浜海岸の目の前にあることから名づけました。宝来館は昭和 38 年に開館しました。当時、釜石は観光ではなく、製鉄関係のビジネス客の受け皿の町で、根浜海岸はリゾート地として休みには大勢の人で賑わっていました。私が宝来館を継いでからは、製鉄所の合理化が図られ、根浜海岸に来る人も減り、どうしたらお客さまが来るのかずっと悩みの種でした。そんな中、平成 7 年頃に日本にグリーンツーリズムという概念が入ってきました。そこで宝来館は平成 9 年に体験民宿を始め、平成 10 年には地域で農業や漁業体験といったグリーンツーリズムに取り組む活動を始めます。その取組みの中でもっと人々が観光に来たいと思う名前を考え、「どんぐりウミネコ村」という名前をつけました。

久保田 産業構造が変わり、来訪者の質も変わる中でグリーンツーリズムというものを始めようと考えられたのですね。

岩崎 当初グリーンツーリズムについて、「漁業体験や農業体験」と捉えてしまっていて、本来の「空間全体を楽しむ場」を作り出すまでに時間がかかりました。地域の皆さんにグリーンツーリズムとは、体験も食べ物も、そこで海を眺めることも含めた空間であること

を分かってもらうためにも「どんぐりウミネコ村」としました。



久保田 「村」というのは空間や地域のまとまりという意味でつけたのですか。

岩崎 そうです。実は震災前から地域で「愛する会」というものを設立し、根浜海岸にあるゲストハウスやコテージ、健康センターの維持管理・運営などを指定管理者として行っていました。地域の皆で役割分担をして運営し、儲けは日当として分けてそれ以外を地域のために使うということをしていました。また、岩手

県立大学さんと一緒になって、学生さんがグリーンツーリズムを体験するメニューなども考えました。震災前のこの活動が震災後のすべてのステップとなります。

震災後の宝来館の役割について

岩崎 3月11日から3月26日までの2週間余り、宝来館は最大で120名の避難所になり、最初の5日間は孤立して自給自足の生活をしました。その後、宝来館が釜石圏内において一番危険な場所にあることが分かり避難所は解散しました。当初は宿も止めるつもりでした。でも、震災後、みんなが戻ってきたい村にする旗振り役のようなものができるかもしれないという思いもありましたし、復旧工事に来てくれたある社長さんから従業員の寝る場所として使わせてほしいと言われ、必要ならば使ってくださいと。だんだんあの津波で残った宝来館に命があるように思えてきて、宝来館を復旧させようと思う気持ちになりました。

久保田 どのくらいの被害状況だったのですか。

岩崎 全半壊でした。2階くらいまで津波がきました。いつかは高台の安全な場所でお客さまをお待ちしたいという気持ちはあります。ただ三陸の復興の途上において、今、宝来館があそこにあることが一つの役割だと思っています。

久保田 役割があると思直された原動力はなんだったのでしょうか。

岩崎 人との繋がりです。宝来館はグリーンツーリズムなどの取組みもしていたので、単なる宿ではなく、人と人が交わる情報の場や出会いの場でした。あと、あの海の前に立つとメラメラと力が湧いてきて、どんなことがあってもやり通すという気持ちになるんです。

現在抱えている問題

久保田 世界遺産が決まったり、ラグビーのワールドカップの開催地に選ばれたり、明るい話題も増えてきていますが。

岩崎 そうですね、世界遺産を目指すのも、実は震災前から私たちのライフワークで、釜石が人の来る観光地になるためには、自分たちの財産の「鉄」を武器にしたいという思いはずっとありました。また、ラグビーのワールドカップも人と人が繋がって、釜石を選んでくださるという結果になるんですね。出会った皆さんの思いによって釜石が選ばれたということに本当に感謝します。人の縁で選ばれたと思いますね。

久保田 縁とかタイミングもあったと思いますが、やはり伺っていると震災前からの積み上げがあったというのは大きいですね。震災があったにしても、それを乗り越えてここまでできた、人のパワーのようなものを世界中から来られる方に感じてもらえることが大事かもしれませんね。

岩崎 私たちがJTBさんに期待することがそこなんです。私たち、釜石人、三陸人はそこに住んで生き続ける力があります。ただ、それを魅力として、自分たちでどうコーディネートしていいかが分からないんですよ。

久保田 釜石の人のパワーと言うんでしょうか。今おっしゃった言葉を借りて言えば「生きる力」のようなものを感じてもらえる仕組みが何か欲しいなど。

岩崎 宝来館をJTBさんが選んでくれた理由は、形にならないものに何かがあるという風に思ったださったというのは何となく分かるんです。ただそれをどう見せていいかが難しいのです。

久保田 地域の方々とコミュニケーションを取りながら、人が訪れ交流できる何かを作っていくのが我々の仕事じゃないかなと思いますね。

岩崎 震災5年目になって見えてきたところもありますが、被災地は今観光で何かをしなければ、工事が終わった途端に誰もいなくなってしまう。10年後、20年後の地域づくりの展望を描かなければいけないのですが、どうしていいかも分からなくて。できることは結局日々の積み重ねしかないということに戻ってしまうのです。

久保田 もちろん堤防などをつくることも大事ですけど、それ以上に無形の財産というか、人づくりというようなものが大事になってくるのかもしれないですね。

岩崎 そうですね。何十年かかるかもしれないけれど、世界中のノウハウを見て、私たちに可能な魅力を生み出せればと思います。

これからの釜石市の復興のあり方について

岩崎 根浜海岸周辺のまちづくりについて、私たちの村では今、任意団体のようなものを作って、人の受け皿の拠点づくりをしようと考えています。また、今まで、多くのアーティストの方がいらっしゃっているのですが、どこで誰が何をやっているのか、あまり広く知られていなかったので、「釜石ではこんなことやっているよ」という情報発信をしようと思っています。震災で知り合った人たちが常に来て、何かを一緒に作り出している村づくりをはじめようと思っています。例えば、村の中にランニングコースやサイクリングコースをつくったり、アーティストレジデンスのようなものを1つ1つ完成していけばいいなと思っています。アーティストの皆さんが釜石で感じて創作されるものがあったり、音楽が朝晩どこから聞こえてきたり、スポーツ選手がランニングをしている、そしてボランティアの方が世界中からきて環境整備のお手伝いをしてきているような村になればいいと思っています。

久保田 行政だけに頼らずに、今までの人脈を活かせる場をつくって新しい地域づくりをしていこうと思われているんですね。

岩崎 そうですね。せっかくこれだけのチャンスをごくださった皆さんがいるので、まずそこに住んでいる自分たちが行動を起こさなければいけないと思っています。そうすることで行政も応援しようという動きになってくれればいいなと思っています。

久保田 観光資源とは、よく「気候」や「自然」、「食べ物」、「文化」とかと言うのですが、今お話を伺っていると、「人」かもしれませんね。被災地において、次に向かって道を切り開いていくようなエネルギーを持っていらっしゃる「人たち」、それはひょっとしたら観光資源と捉えてもいいのかもしれないなと思います。



JTB への期待

岩崎 JTB さんがお客さまを連れてきやすい魅力を私たちが早く見える形にしないとけないだろうなと思います。ツアーとして人が集まらなくても継続的に来ていただくことで、私たちもおもてなしを磨き、勉強しますので、まずは「諦めずに人を運んでください」ということが今言えることです。

久保田 これからはスポーツツーリズムもありますし、釜石の地域のコミュニティのあり方を考えるツーリズムというのもあるのかもしれませんが、自然環境を活かすツーリズムもあると思います。我々も一緒に釜石の魅力が何か、どうやったら人が来るのかを考えていけたらと思います。

岩崎 ぜひお願いします。



久保田 それからやはり震災から5年の節目なので、また来たくなるような仕組みを地域の方々と一緒に作っていかねばいけないなというのはあります。キーワードは「人」で、「人」を観光資源にしたような、被災地だからできるようなことがあるのではないかなと思うんですね。皆さんがお作りになろうと努力されている仕組みとも連携しながら、人を送り込んでいくという次の段階に行けるように我々も色々な取り組みをしていきたいなと思っています。ビジネスというのはやはり両方にとってプラスであり、訪問するお客さまも地域や行政にと

っても、程度の差はあれプラスにならないと続かないですよ。持続可能な仕組みづくりのために知恵を出していきます。

岩崎 ありがとうございます。そのような思いをいただきましてすごく感謝しますし、そうやって村を育てていきたいです。諦めずに頑張ります。よろしくお願いします。